

# 女子高校野球の聖地

# 丹波の熱い夏

平成12年4月、第1回全国高等学校女子硬式野球選抜大会を開催してから17年。参加校の減少、豪雨災害を乗り越え、丹波市は高校女子硬式野球の聖地といわれるようになりました。

近年は毎年参加校が増加するなど、高校女子硬式野球と大会を取り巻く状況が大きく変化しています。変化の中でも、聖地で行われる大会を守ろうと多くの大会関係者の挑戦が続いています。



## 最多優勝記録を樹立

8月3日、第21回全国高等学校女子硬式野球選手権大会が閉幕しました。大会史上最多の26チームが集まり、熱い戦いが繰り広げられました。決勝は、4月に行われた第18回全国高等学校女子硬式野球選抜大会と同じ、履正社高校（大阪府）と埼玉栄高校（埼玉県）の対戦。1対0の接戦を制し、埼玉栄高校が2年ぶり7度目の優勝を果たしました。今回の優勝で、埼玉栄高校は、神村学園高等部を抜いて、大会史上最多優勝記録を樹立しました。



## 春の雪辱を果たす

「優勝できて嬉しいです。春の選抜大会で準優勝だったので、夏の選手権大会では絶対優勝しよう」とチーム一丸となって戦いました」と語ってくれた、埼玉栄高校主将の蛭田菜月さん。

試合は1点を守る接戦になりました。4回裏、蛭田さんは出塁してチャンスをつくり、ホームベースを踏みました。

「優勝は多くの人の支えがあったからこそ。支えてくれた監督や両親、ベンチに入れなかった仲間や贈りたい」と謙虚。「野球は楽しいです。進学後もクラブチームに入って、野球を続けたいです」とはつらつと答えてくれました。



埼玉栄高校主将 蛭田菜月さん

## 女子高校野球の魅力

なんと言っても魅力は「勝って泣き、負けて泣く」全力プレー。その姿には、選手を取り巻く状況と切実な想いがこもっています。

高校で、女子硬式野球部の創設が相次いでいるものの、まだ全国で25校。近くの高校に野球部がなく、男子に混ざって練習する、クラブチームに入るといふ選択肢しかない選手が多くいます。また、同じ都道府県内に複数チームがあるのは京都府・大阪府・東京都・埼玉県のみ。野球部のある高校に入っても練習試合の相手を探すのに苦労するのが現状です。

選手たちにとって、春夏2回の全国大会は、性別・年代の同じ選手と対戦する貴重な機会なのです。

## 思いきり野球ができる舞台を

頑張る選手たちが思い切り野球ができる大会にしようと、多くの人が運営に携わっています。

大会の運営は、ボランティアの実行委員が担い、審判は、市の軟式野球協会、アナウンスは軟式野球協会のアナウンス部が行います。地域や近隣の高校は、かき氷や食

べ物の出店をしています。また、グラウンド整備には、日本女子プロ野球機構、関西国際大学野球部も参加。市内外の多くの人の力で大会が支えられています。

## 強くなって丹波に帰る

「昨年5月にグラウンドができて、練習試合の相手を学校に呼べるようになったんです」と話すのは、履正社高校の石村奈々さん。これまでは、練習試合の度に相手の学校に向いていたため、移動時間が長く、負担だったといいます。

「練習相手も増え、やっと思い切り野球ができる環境が整ったと感じています。来年はもっと強くなって丹波に帰ってきます」と話してくれました。



履正社高校 石村奈々さん

# 聖地での大会を支える

大会は、丹波市全国高等学校女子硬式野球大会実行委員会を中心になって支えています。会場準備や開会式、閉会式など幅広く担います。今大会で初めて、スポーツピアいちじまと春日スタジアムの2会場制を採用。女子高校野球が丹波市で開催するきっかけをつくった堀秀政さんは、人手不足に悩みながら、実行委員の仲間とともに奮闘しています。

## はじめは新聞記事

平成9年、関東ではじめて全国高等学校女子硬式野球選手権（以下、夏の選手権大会）が行われ、高校女子硬式野球（以下、女子高校野球）初の全国大会です。

第1回の夏の選手権大会の新聞記事を読んで驚いたのが、市島地域在住の堀秀政さん。福知山商業（現福知山成美）野球部OBで、高校時代は投手として活躍。ノンプロに進み、退団後は母校で監督を務めました。監督引退後、野球に関わる人生を支えてくれた人へ恩返しをしたいと考えていました。自分がしてもらったように、女子高校球児が思い切りプレーできるように支えようと決意しました。

たずねて連絡。第2回の夏の選手権大会から手伝いを始めました。私財をなげうち、女子高校野球の普及を進める四津さんの姿に心打たれ、ますます力になりたいと考えるようになりました。

## 春の選抜大会誕生

平成11年、旧市島町が翌年完成予定のスポーツピアいちじまのこけら落としイベントを模索していると聞き、女子高校野球の春の全国大会を提案。四津さんへも相談し、旧市島町協力の下、全国高等学校女子硬式野球選抜大会（以下、春の選抜大会）が初めて開催されました。

平成26年、北海道や東北に女子高校野球を広めるため、関東地方に大会の移管が決定。3年生最後の夏の大会は「聖地」丹波市での参加校の要望を反映し、春の選抜大会が関東で行われることになりました。



堀 秀政さん  
市島地域在住

## 連合チームに期待

春夏大会には、女子高校球児が思い切りプレーできるようにという願いを形にした、全国高等学校連合丹波というチームがあります。平成17年の夏の選手権大会で創設。女子硬式野球部に所属せずに練習している選手を全国から募ります。



## interview

今年初めて、全国高等学校連合丹波の一員として大会に出場しました。現在は、地元の学校に進学し、クラブチーム「丹波ガールズ」で野球をしています。野球が好きなので、全国大会の試合に出られるチャンスがあるのがうれしいです。野球を続ける大きな励みになります。

濱田優奈さん  
養父市在住

## 女子高校野球のトリコ

7月22日、大会実行委員が大会の準備を始めていました。実行委員は、堀さんが監督を務めていた草野球チーム市島シニアの仲間が中心です。17年が経ち、高齢化が進む一方で、若い40代のメンバーの活躍も目立ちます。市島地域以外のメンバーも増え、支援の輪は広がっています。

「みんな女子高校野球のトリコ。全力でプレーする姿を間近でみると応援したくなる」と実行委員の斎藤賢次さんは笑います。堀さんは「参加校が増え、大会が2会場制になったから、本当に人手不足。新たな女子高校野球のトリコを獲得しないと」と意気込みます。

休憩中、堀さんが「野球経験者のメンバーは、選手に自分を重ねるところがあるんじゃないかな」と話すところからは、毎年選手と一緒に青春をやり直している気分であるわ」と実行委員の荒木義孝さんが応えます。

## まだまだ通過点

最多出場校を更新した今回の夏の大会ですが、人手不足という新たな悩みを抱えています。「甲子園は99回大会を迎えたけど、女子の夏の選手権大会はまだ21回。今は通過点」と堀さんは言い切ります。昨年は、選手として参加していた叡明高校の田中碧、岐阜第一の小久保志乃両監督の凱旋という嬉しい出来事もありました。

「応援する側の男がモタモタするわけにはいかんから」と、堀さんは仲間とともにこれからもグラウンドで暑い夏を過ごします。



笑顔の絶えない実行委員のメンバーたち

## 特集 女子高校野球の聖地 丹波の熱い夏



1\_真剣な表情で大会のぼり旗を作成 2\_準備の際に真っ先に張り出される大会名 3\_試合の行方を見守る実行委員たち 4\_会場周辺の看板設置も実行委員の大切な仕事 5\_審判を担うのは地元の軟式野球協会 6\_アナウンスは軟式野球協会アナウンス部が担当



特集 女子高校野球の聖地  
丹波の暑い夏



1\_思いっきりバットを振り抜く埼玉栄の選手 2\_緊張の第1試合のようす 3\_泥だらけになりながらの駒沢学園女子の力投 4\_果敢に盗塁を決める埼玉栄の選手 5\_祈るように試合を見守る履正社選手 6\_大きな声を張り上げて全力応援 7\_引退する畑茂大会副会長最後の講評



グラウンドに積みあがっていた土砂と流木

「大会の開催を望む声に実行委員も奮起し、災害翌年の19回の大会をスポーツピアいちじまで開催しよう」と奔走。しかし、グラウンドの整備が間に合わず、春日スタジアムでの開催が決定しました。試合後に市島まで写真を撮りに訪れたチームもあり、選手にとってスポーツピアいちじまでのグラウンドが特別な場所になっていたことを改めて実感することになりました。災害を乗り越え、平成28年の第20回記念大会をスポーツピアいちじまで開催。災害前と変わらず、暑い夏の大会が続いています。



荻野広さん・尚美さんご夫妻  
市島地域在住

interview

移住してまだ1年。市内で全国大会があると聞いて、夫を誘って見にきました。ソフトボールの経験があり、野球が大好き。彼女たちの試合は、全力プレーで見ていると楽しいですね。会場も活気があって、観客席からの眺めも開放的で気に入りました。

私たち、ここで野球がしたい。

平成12年、丹波市で春の選抜大会が始まったとき、出場したのは8チーム。いまや北は北海道、南は鹿児島県まで、全国の高等学校などから26ものチームが集まります。選手たちにとってスポーツピアいちじまのグラウンドは負けて涙し、勝って涙した特別な場所。

春の選抜大会が関東に移管してからも、市島のグラウンドこそが聖地だと全国から集まってくる選手がいます。

聖地「スポーツピアいちじま」

春夏大会の全39回のうち、28回は丹波市で開催されています。初開催当時から会場のスポーツピアいちじまは、選手にとって特別な場所です。たった1度だけ、災害の影響で、春日スタジアムで決勝が行われた19回の夏の選手権大会。優勝した埼玉栄高校の3年生の選手は「春日スタジアムは設備が整っていてプレーしやすかったです。ただ、やはり私たちの聖地は市島のグラウンドなんです」と最後の夏にスポーツピアいちじまのグラウンドに立てなかつた

丹波市豪雨災害発生

平成26年8月16日、経験したことがない豪雨が丹波市を襲いました。甚大な被害を受けた会場周辺地域。関西を中心に複数の学校がボランティアに駆けつけ、泥だら

やしさをにじませました。今年の夏の大会準備優勝校の履正社高校の選手は「このグラウンドは、初戦敗退の悔しさを噛み締めた場所。初めて勝利した場所。先輩の果たせなかった春夏連覇の夢をここで果たしたいです」といいます。

豪雨災害を乗り越えて

大会が近づくと「その後復旧は進みましたか」「大会は開催できるような状態ですか」「会場はスポー

けになりながら被災家屋の片付けをしました。あまりの被害に、選手からは翌年の大会開催を危ぶむ声も上がりました。また、グラウンドは、土砂・流木の仮置き場として使用されることと決定。土砂が積みあがり、変わり果てた姿とダンブが走り回るようすに、実行委員からも大会開催に不安の声が上がるほどでした。





## ひたむきな挑戦は続く

「多くの選手が野球をするために親元を離れて頑張っている」「思いっきり野球ができる喜びが心の底からわいてくる」福知山成美高校の主将阿部希さんの選手宣誓には女子高校球児の置かれている状況や想いが表現されていました。

困難な状況の中、ひたむきに野球に打ち込み、全国大会をめざす女子高校球児たちの夏の夢舞台、丹波。一人の市民の想いをきっかけに、春の選抜大会が開催されてから17年間ずっと、女子高校野球の聖地であり続けています。

今年に変化の多い年でした。参加校増加による2会場制の開始。大会副会長であり、全国高等学校女子硬式野球連盟の畑茂会長が今年をもって引退を発表しました。

しかし、どんなに状況が変化しても選手が大会をめざす限り、夢の舞台をオール丹波市で守ります。

これからもひたむきな挑戦が続きます。



## 共に大会を守る

全国の女子高校球児の聖地丹波市の大会を守るため、行政・企業・市民協働の取り組みが進められています。限られた財源、人員で互いに協力し、持続可能な大会運営体制を模索します。

### さらなる協働と情報発信へ

7月12日、市と大塚製薬株式会社は市民の健康を維持・増進するため、連携協定を行いました。協定の場で、夏の選手権大会への飲料提供を発表。連携協定とともに「女子高校野球の夏の選手権大会」について報道され、PR効果を発揮しました。開会式には20台近いテレビカメラが入り、報道陣も全国から19社が訪れました。今後は、企業との協働も視野に入れながら、全国で唯一の夏の選手権大会を積極的にPRしていきます。

### 持続可能な大会運営へ

夏の選手権大会は、全国高等学校女子硬式野球連盟側の主催者事務局と市を中心とした大会事務局の2事務局体制で運営しています。これは市の体制が代わっても、大会を運営・維持するためです。平成26年の災害時には、スポー



長奥喜和課長  
文化・スポーツ課

ツ・芸術イベントが相次いで中止、職員数も減少しました。大会事務局の文化・スポーツ課の長奥喜和課長は「夏の選手権大会は、女子高校球児の夢舞台です。大会を守るには、市民と共に何が起きても持続可能な大会運営体制を築くことが必要不可欠です」と話します。

参加校が増え、初めて2会場制となった今大会。運営体制の見直しも行いながら、今後も主催事務局をはじめとする市民と協力し、市は大会を全力でサポートします。

### interview

全国高等学校連合丹波とクラブチーム「丹波ガールズ」の監督をしています。女子高校野球の発展には、試合に出る機会と練習の場の確保が必要です。丹波地域の女子高校球児がクラブチームで腕を磨き、連合メンバーとして大会に出られるのが何よりの喜びです。

足立俊長監督  
福知山市在住

